

6月末にAAFCに入会してから一か月が過ぎようとしているが、既に例会や分科会に参加し、何人かのメンバーの話を伺う機会も得た。そのような充実した最初の一か月を通じ、メンバーの方々のオーディオへの情熱と造詣の深さには驚くばかりだった。一方、私と言えば、ソフト面でもハード面でも、深く掘り下げてきたと自信を持てるものは残念ながら無い。しかしそれでも長年、音楽を身近に感じ、音楽に癒され、ある時には元気をもらってきた。今回のエッセイ執筆を、そのような私の今までの音楽との触れ合いの歴史を家族共々の生活史に絡めて振り返る機会としたい。メンバー各位には恐縮ながらしばらく駄文とお付き合い願えれば幸いです。

## 1954年～1973年：生地福岡での19年間

私は1954年に福岡市に生まれ、高校卒業まで暮らした。その時期、私が音楽と触れ合う最初のきっかけは、小学校5年の時に父がアンサンブルステレオを購入したことだった。しかし、私の小遣いではレコードを買うことは簡単ではなく、父が買ってくるレコードを聴くことが中心だった。それが主にどんなジャンルだったかといえれば、日本の軍歌だった。父は昭和の初めに子沢山の農家に生まれ、14歳で海軍特別年少兵に志願し17歳で終戦を迎えた。同期生の3分の2が戦死した過酷な経験だったと生前に語っていたが、その時代に郷愁も感じていたらしく、父が買い増してゆく軍歌集や、僅かに混じる歌謡曲のレコードを聞く機会が増えていった。

一方、高校卒業までに自分で買ったレコードといえば、加山雄三の「蒼い星くず」やジャガーズの「君に会いたい」その他数枚のシングルのみだった。



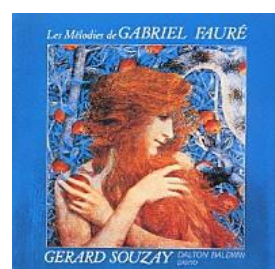
その間、どうやって音楽と親しんでいたかと言えば、ラジオの深夜放送だった。1967年にニッポン放送のオールナイトニッポン、2年後の1969年に文化放送のセイ！ヤングの放送が始まり、流される内外の流行曲を聴くことが毎夜の楽しみだった。

## 1973年～1977年：上京、そして大学生活の4年間

1973年春に大学に進学し都内での下宿生活を始めた。今まで福岡以外に住んだことが無く、また大阪より東には旅行の経験もなかった私には、うどんやラーメンのつゆが黒いことも、「テレビのアナウンサーが話す言葉」としか認識していなかった標準語を話す人々が目の前を普通に歩いていることも、すべてが新鮮だった。

最初の一年ほどは、短期アルバイトと授業に追まられる日が続いた。しかし、2年生になると大学生活にも慣れ、家庭教師のアルバイトの掛け持ちで気分的・経済的に多少の余裕が生まれ、「音楽を聴きたい！」という欲求が戻ってきた。そこで、アルバイト代をため、当時流行の4チャンネルステレオを購入し、グループサウンズやフォークソングなどのレコードを20-30枚揃えて、いっばしのオーディオマニアになった気分を味わっていた。

それやこれやで日々を過ごしているうちに、音楽好きの友人の間に、互いの家に集まったの試聴会やレコード紹介などが始まった。そのなかに、親の薫陶で大学生にして既にクラシック音楽に造詣が深く、レコードも多数揃えている友人がいたことが、私とクラシック音楽との最初の出会いだった。その友人が特に好んでいたのがフォーレやシューベルトの歌曲集で、例えば彼に紹介されたジェラルド・スゼーが歌うフォーレ名歌集アルバムの「夢のあとに」は、今でも私の愛好曲であり続けている。



一方、私にとってレコード鑑賞と並ぶ重要な音楽ソースは、以前と同様にラジオの深夜番組だった。しかし、さすがにオールナイトニッポンやセイ！ヤングは卒業し、新たに私が親しんだのはFM東京の音楽番組だった。特に、平日深夜0時~1時放送の「ジェット・ストリーム」と、毎週金曜深夜1時~2時放送の「男の心、女の心」は忘れがたい。夜の下宿で音量を上げるわけにはゆかず、ラジオに耳を近づけて聞き入っていたことは今でも鮮明に覚えている。

そして、両番組で流される曲と同様に私の心をとらえたのは、オープニングでのナレーションだった。「ジェット・ストリーム」の城達也、「男の心、女の心」の深沢道子による、低い落ち着いた声での、ちょっと気障だがしゃれた文句での語りかけに耳を傾けていると、自分が大人になったと実感できる気がしていた。

### 「ジェット・ストリーム」オープニングナレーション(全文)

遠い地平線が消えて、深々とした夜の間に心を休める時、遥か雲海の上を音もなく流れ去る気流は、たゆみない宇宙の営みを告げています。

満点の星をいただく果てしない光の海を、豊かに流れゆく風に心を開けば、煌く星座の物語も聞こえてくる、夜の静寂の、なんと饒舌なことでしょうか。光と影の境に消えていったはるかな地平線も瞭に浮かんでまいります。

これからのひと時。

日本航空が、あなたにお送りする音楽の定期便。「ジェット・ストリーム」。

皆様の、夜間飛行のお供を致しますパイロットはわたくし、城達也です。

### 「男の心、女の心」オープニングナレーション(抜粋)

この時間に目をさましていらっしゃるあなた、そしてこの番組を聴いておいでのあなたはどんな方でしょう。どこで、何をしていますか、あなたは。楽な姿勢とくつろいだ心でこれからの一時間、私と一緒に過ごして下さいませ。

わたくし？ 私、深沢道子、精神科のカウンセラーです。  
縫れた人間関係の糸を解くお手伝い。人間関係といってもほかの人の関係だけではなくて、自分の心のなかにいる何人かの人間の争いもございますでしょ。

### 1977年～1993年：社会人生活開始からの16年間

1977年に大学を卒業し都内の或る民間企業に就職した。そして、1981年の結婚と同時に松戸でのアパート生活が始まった。更に、1983年の長男誕生と今も住む守谷市の自宅購入、1986年の次男誕生、1987年の大阪転勤など大きな変化が続いた。また、昭和のサラリーマンの例に漏れず、仕事も段々と忙しさが増して音楽に接する時間は激減したが、それでも細々ながら、就職後に買い替えた少しはグレードアップした機器でクラシックやポップスなどのレコードを楽しんでいた。

右は、1983年夏の自宅アパートでの写真。先輩から譲られた Celestion のスピーカーと、左半分が切れているが入門クラスの機器類が写っている。



しかし、1983年に住宅ローンと長男の育児費用の出費が始まり、翌年には30歳を迎え仕事も更に忙しさを増して深夜残業と休日出勤の生活が続くなかで、残念ながら音楽との触れ合いは完全に中断した。それは、1993年のヘルシンキ転勤まで続いた。

### 1993年～1998年：ヘルシンキでの5年間

1993年にヘルシンキに転勤し1998年に帰国するまで、家族全員にとって初の海外生活を通じて、音楽の面でも思い出深い5年間となった。ヘルシンキは北緯60度に位置し、日本人の感覚では10月から4月までの半年以上が冬と言ってよい。ピークとなる12月から1月にかけては、夜は時には零下30度近辺まで気温が下がり、昼も夜のような暗さの日が続く。そこで暮らす人々にとって冬の季節の主な娯楽といえば、屋内スポーツとサウナ、自宅パーティー、そして教会などでの音楽会などだった。

私たち家族もその慣習に倣い、冬の間は機会あるごとに宗教音楽やバロック・クラシックを主とする音楽をライブで楽しんだ。その会場として最も思い出深い3か所の教会を下に紹介する。

ヘルシンキのシンボルとも言える、ルター派教会、通称「大聖堂（英語名 White Church）」。ここででの賛美歌を聴くことができたのは光栄だった。



旧ソ連地区以外では最大と言われるロシア正教会のウスペンスキー大聖堂。ここで聞くロシアン・チャントも素晴らしかった。



ヘルシンキ中心部の巨大な岩を削りぬいて作られた、現代教会建築の世界的傑作とされるテンペリアウキオ教会（別名「岩の教会」）の内部。冬季の間、各種のコンサートが催されていた。



更に、フィンランド在住の日本人ピアニスト館野泉や、世界的にも著名なヘルシンキ大学男声合唱団の活動支援のため、会社から僅かながらも寄付をしていた関係で、出席者少数の特別演奏会に招待されるなどの貴重な機会を得ることができた。同時に、フィンランド生活を通じて、同国を代表する作曲家シベリウスの作品に触れたことも、その後の貴重な財産となった。例えば、交響曲第二番、交響詩フィンランディアやトゥオネラの白鳥など、北欧の憂愁を湛えた作品群は現在も愛好曲の一角を占めている。

## 1998年～2003年：帰国、そしてまた忙殺の5年間

1998年暮れに東京に戻り、連日の深夜残業と頻繁な国内外の出張、それにGWと年末年始なども削っての休日出勤など、今までの人生で最も仕事に忙殺された日々が始まった。当時、私の健康を家内は本気で心配したと後になって聞かされ、反省している。そのような、またも音楽を楽しむ余裕など全くない生活が5年間続いた。

## 2003年～2006年：米国単身赴任の3年間

その状況が変わり、音楽と共に暮らす喜びを再び取り戻せたのは、2003年の米国西海岸オレゴン州ポートランドへの単身赴任だった。そこでも、平日は相変わらず忙しかったが深夜残業は無く、週末は自分の時間を確保できた。そして何ととっても、家内の目は1万キロ離れた太平洋の彼方に有るという事実が、長らく抑えてきた「音楽を楽しみたい。その為に良いシステムが欲しい」という熱情が燃え上がる契機となった。

それから、週末のたびにポートランド近隣のオーディオ店を訪ねて試聴しまくり、少しでも気に入れば買ってみたいという生活が始まった。結果、事前の試聴と購入後に自宅で聴く音が全く違ったり、「安物買いの銭失い」に終わったりで早々に売却するなどの失敗も経験したが、3年目の2005年暮れには下の写真に示すシステムが整った。また、写真にも写っているように、気に入ったCDや映像ディスクを少しずつ買い集めることを始めた。

### (2005年暮れ、自宅アパートにて。左)フロント、右)リア)

CD プレイヤー : PRIMARE CD31      DVD プレイヤー : ARCAM FMJ DV27A

アンプ : PRIMARE Pre30/A30.2      AV アンプ : ARCAM AVR-300

アナログ : Pro-Ject RPM6SB      フロント・リア SP : Sonus Faber Cremona Auditor

センターSP : Sonus Faber Domus Center      サブ・ウーファー : REL

TV : 当時の大型液晶テレビは高価過ぎ、Sony の 50 インチプロジェクションテレビ。

解像度 1280x720、コントラスト 200:1 という、現在では考えられない性能だった。

(後述の Air Tight 真空管アンプも発注済だったが撮影時点では納品待ちだった)



加えて、今でも懐かしく思い出す、夫婦のみで経営している The Audio Gallery という小規模なオーディオ店に出会えたことが、今に至る私のオーディオ生活に大きな影響を与えた。その経営者の趣味を凝らした、美しい店内ディスプレイや、経営者自身の設計による、美観と音響性能を両立させた試聴室など、店内の様子を紹介できる写真が無いことが残念でならない。

その店では、店主が自分の耳で厳選したブランド/モデルに絞って取り扱っており、その中に今も愛用する Air Tight の真空管アンプが含まれていた。現有の Air Tight のプリアンプ ATC-3 とパワーアンプ ATM-1 は、私の好きなディスクを店主と一緒に聞いてもらった結果、Sonus Faber Cremona Auditor や Siltech ケーブル類とのセットで勧められ、纏めて購入したもの。私が購入できたのは各ブランドではエントリーからミドルクラスのモデルであったが、店の試聴室で聴いた、Air Tight のハイエンドアンプと、当時の Sonus Faber フラッグシップ Stradivari Homage が奏でる極上の音は今でも鮮明に記憶に残っている。今に至るまで、自宅で聞く音を視聴室での思い出の音に僅かでも近づけたいと願い続けているが、残念ながら遥かに遠い、手が届かぬ目標であり

続けている。

その店のことは帰国後も忘れられず、いつの日か再訪したいと願っていたが、残念ながら2012年夫の病死と共に閉店した。閉店後もしばらくは妻の手によってホームページが維持され、関連業界で知られた存在であった夫に寄せられた追悼の辞なども加えられていたが、それも数年前に閉鎖された。

## 2006年～現在までの16年間

2006年に帰国して以降、仕事の面では以前の最前線での営業業務に代わり、比較的自分の時間を確保できる管理業務が主となった。その勤務先は2014年に定年退職し、2年近く就活も特にせず無職生活を満喫した。しかし徐々に退屈の気分が増し、つくば市の或る国立研究所で4年勤務した。しかしそこも65歳到来を機に退職し、無職に戻って現在に至っている。そのような、帰国から現在に至る16年間は、数年ごとに生活環境が大きく変化し、音楽との触れ合いもオン・オフが激しかった以前とは異なり、多少の繁閑の波は有ったがそれなりに音楽を楽しめる生活が続いている。

一方、ハードの面では、アンプとアナログプレイヤー以外は既に更新した。例えば、Cremona Auditor のリア側2本は日本の狭い部屋には置けず帰国前に売却した。また、帰国後数年でCDプレイヤーはPrimare CD31からAccuphase DP-700に、フロントスピーカーはCremona Auditorから同ブランドのGuarneri Mementoに切り替えた。更に、今年に入ってUSB DAC兼ヘッドホンアンプを2機種導入し（RME ADI-2 DAC FS 及びBenchmark DAC3 HGC）、CDプレイヤー内蔵DACも含めて適宜切り替えて、音の違いを楽しんでいる。

右の写真は現在の視聴部屋の様子。6畳の洋室で、一応私中心に使っているが後方には箆笥などの家具が有り、非常に手狭になっている。長年、家具を他の部屋に移してくれるよう家内に懇願しているが、「贅沢言い過ぎ」として許可を得られずにいる。



次ページの写真は手持ちのCD、僅かだがLPレコード、そして映像ディスク。

CDとレコードを合わせ、バッハ以前の古楽が3割、古典派以降のクラシックとジャズが2割ずつといった感じ。残った3割は洋楽ポップス、邦楽、ラテン、映画音楽など雑多。尚、私は、ジャンルを問わず女性の声が好きで、クラシックやジャズなど女性の歌

が入ったアルバムが多い。また、映像の方はSFが半分で残りは雑多。



さて、私の駄文を連ねたエッセイも終わりに近づき、末筆ながら私のオーディオ生活に、つい先日久しぶりに訪れた大きな転機につき触れたい。それは言う迄も無く、AAFCとの出会いである。我孫子から遠くない守谷市に長く住み、ささやかながらもオーディオを趣味にしていながら、AAFCのことは存在すら全く知らずに日を送ってきた。ところが、6月29日にFacebookを見ていたところ、7月2日分科会の予告ポスターがたまたま目に留まり、それで初めてAAFCの存在を知った。早速ネットでコンタクト先を調べ、その日のうちに入会申込のメールを送ったところ有り難いことに直ちに承認頂いた。それで、AAFCを知るきっかけとなった7月2日分科会は先約のため欠席したが、7月3日の例会に早速参加した。それからまだ一か月しかたたぬ間に、私にとっては長年望みながらも機会を持てなかった、私とは異なる、或いは私を超えるオーディオや音楽の知見と経験をお持ちのメンバーの方々と、早速言葉を交わし有り難いアドバイスも得られた。今後も、AAFC活動への参加が、私の音楽との触れ合いにどれほどの豊かさを加えてくれるものか、楽しみでならない。

以上、長いエッセイにお付き合い下さいましてありがとうございました。  
今後は是非宜しくお願い致します。

以上



我孫子オーディオファンクラブ <http://www.aafc.jp/> 2022年8月号

編集責任者 鈴木道郎